

# 東京音楽大学リポジトリ

## Tokyo College of Music Repository

### 明治初期のピアノ:文部省購入楽器の資料と現存状況

メタデータ	言語: ja 出版者: 公開日: 2009-12-10 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://tokyo-ondai.repo.nii.ac.jp/records/870">https://tokyo-ondai.repo.nii.ac.jp/records/870</a>

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



# 明治初期のピアノ

—文部省購入楽器の資料と現存状況—

武石みどり

日本人の組織的なピアノ学習は、明治12年に海軍軍楽隊および式部寮雅楽課で始められたとされている（塚原1993：204-205, 249-250）。公の音楽教育機関としては明治12年10月に音楽取調掛が設置され、ボストンの音楽教育家ルーサー・ホワイティング・メーソンの来日（明治13年3月）に合わせて、10台のピアノと20冊のバイエル・ピアノ教本がアメリカから送られたことが知られている。しかし、こうしたピアノ学習胎動期に導入されたピアノがどのようなメーカーや型のピアノであったのか、すべて消失してしまったのかについては明らかでない。音楽取調掛のピアノに関しては、唯一『東京芸術大学百年史 東京音楽学校編』に最初の10台がチックリング製であったと記述されている（東京芸術大学1978：35）が、現存する音楽取調掛関係資料をあたっても、その根拠となる文書を見出すことはできない。一方、メーソン来日の直後に横浜で発行された英字新聞 *Japan Weekly Mail*（1880/3/6：303）の記事には、音楽取調掛に10台のクナーベ製ピアノが準備されたと明記されているため、近年、最初の10台のピアノのメーカーについて再び疑問が提示されるようになった（宇都宮2001：157-159）。

このような状況を前提として、本稿では、明治初期に導入されたピアノに関する一次資料を出来る限り発見・調査し、またこれまで個別に扱われてきた幼児教育・体操教育の分野の動きにも横断的に注目することにより、明治初期に公のルートで日本に送られたピアノ<sup>1</sup>について、購入の経緯とメーカー、台数についての情報を整理し、それが現存する楽器や写真とどのように関連付けられるかを考察する。

## 0. ピアノの導入の三段階

洋楽導入史をたどってみると、明治5年8月にイーヴェン・トゥルジェーが森有礼にメーソンを推薦（安田1993：15）してから、上述のように明治12年にピアノ学習の動きが各所で顕在化するまで、実に7年以上の歳月を要している。しかし、ピアノの導入に関わる文書資料を

---

1 明治期には、これよりも早く在留外国人や洋行帰りの日本人によって個人用のピアノが日本にもたらされている（塚原1993：249）が、本稿ではそれらは考察の対象としない。

周辺分野を含めて探索・整理してみると、その動きはすでに明治9年から始まっており、しかも幾つかの教育分野にわたっていることがわかる。

## 1 第一段階：幼児教育

### 1.1 女子師範学校附属幼稚園

明治8年11月29日に開校された女子師範学校（現・お茶の水女子大学）の校長中村正直は、明治9年2月19日の日記『敬宇日乗』に「始看ピアノ至校〔初めて学校でピアノを見た〕」と記している。これが当時の文部省直轄学校のピアノに関係すると思われる最古の記録であるが、この記述では詳しい経緯がまったくわからない。ピアノに関する最初の公の記録は、『東京女子師範学校第三年報（自明治九年九月至明治十年八月）』の「器械現数表」にある「ピアノ（現在数一個、増数一個〔1台増えて現在1台がある〕）」という記録で、同表では「オルガン一個」と「幼稚園玩具類九四八個」も備えられていることから、おそらくは明治9年11月16日に附属幼稚園を開業したのに伴ってピアノ1台が備えられたものと推測される<sup>2</sup>。ピアノのメーカーや型式、鍵盤数については全く情報が無い。幼稚園の開設にあたって参考にされたフレーベルの『幼稚園創立法』に、「楽器 一面」を「日常遊戯室ニ設置シ歌唱、戯劇、體操或ハ跳舞等演習ノトキ奏樂合調ノ用ニ供ス」と記されている（『教育雑誌』84：19）とおおり、附属幼稚園でも遊戯室にピアノが設置された（倉橋・新庄1956：236；竹村1960：137）。主任保母として採用されたドイツ人の松野クララ（中村1993：201-233）は、フレーベルの保育に通じ、ピアノが弾ける唯一の人物であった。しかし、ここですぐに西洋音階の唱歌が歌われたわけではない。保育唱歌の作成と指導は、式部寮雅楽部の伶人が担当した。開園から1年後の明治10年11月、皇后を迎えての開業式の記録には、「園児唱歌シ保母奏スノ右箏ピアノ合奏」とあり（『教育雑誌』52：22-23）、伶人が作曲した保育唱歌をピアノと和琴で同時に伴奏したことがわかる。但し、「楽器使用も今日の唱歌に於けるのとは幾分異なって居て、保母のうたふ唱歌に楽器の音の方が調子を合せるといふ程度で、楽器そのものの音には餘り重きを置かなかつたやうである。それは保育唱歌が全く雅楽調で、楽器の奏する旋律がごく弱く、幼児のころをひきたてる性質のものではないからである」（倉橋・新庄1956：235）という説明のおおり、保育唱歌は本来ピアノの伴奏を必要とするものではなかつた。これとは別に、クララは月曜と木曜の週2回ピアノ〔西洋の樂曲〕を演奏し、また「保育室の出入にはその頃から既に、今行っているやうに、ピアノが奏せられ、幼児はその音につれて歩調を整へた」という回想に示されるように、園内の生活で幼児の活動内容の変化に合わせてピアノを奏した（倉

---

2 『敬宇日乗』に記されたピアノが幼稚園のために準備された楽器であったとすると、ピアノは幼稚園開業よりもかなり前に到着していたことになる。

橋・新庄 1956 : 81, 235-237)。すなわち、女子師範学校附属幼稚園においては、雅楽調の保育唱歌と松野クララが弾く西洋楽曲との二様の音楽があったことになる。

## 1.2 伶人のピアノ伝習

同じ明治 10 年の夏、遠く離れたボストンでは伊澤修二と目賀田種太郎がメーソンに音楽を学び、ニューイングランド音楽院の講習に参加、日本の音楽教育に西洋音階を導入し、アメリカから教師とピアノ・オルガンを送ることを決定していた（安田 1994 : 14-15 ; 安田 1997 : 1-2)。しかし、ピアノ学習は、日本で実際に楽器を手にした者たちの間で、先行して実現された。明治 11 年 3 月、海軍軍楽隊はベルギー公使館から競売に出たピアノ 1 台を 225 円で購入したが、伝習の開始はアンナ・レールという指導者を得る明治 12 年 5 月まで先延ばしされた（塚原 1993 : 204-205 ; 中村 1993 : 366-368)。一方、明治 11 年から女子師範学校附属幼稚園で保育唱歌の指導を開始した伶人たちは、幸運にもピアノという楽器とそれを指導できる人物との出会いを同時に得ることができたため、松野クララの下でピアノ学習を開始することができた。

公には、伶人のピアノ伝習の要望書は明治 11 年 11 月 30 日に提出され、二度目の要望で明治 12 年 3 月 19 日から伝習が許可されている（塚原 1993 : 249-250) が、それに先立つ個人教授について、芝葛鎮（ふじつね）の日記で経緯をたどることができる。最初の要望書提出の 1 ヶ月以上前、10 月 19 日の記述で開始が確認できる。

午後四時より松野 礪（はざま）方へ参ル。妻獨逸人クララニピアノ傳習ス。以後土曜日毎二行向候約束ス。

11 月 7 日の日記には、太政大臣の職にあった三條実美から、すでにピアノを学習している伶人がいるかどうかを尋ねられ、これからの時代、伶人はピアノを練習しておいた方がよいから、松野クララへの謝礼を個人で払うのではなく、公の伝習にして雅楽課の方から謝礼を払うように便宜を図り、さらにはレッスンの復習に三條家のピアノを使ってよいという提案まで受けたことが記されている。

三條太政大臣殿洋琴之儀二付、御尋問有之候二付、本日午後早々御邸へ予出頭候様、寮頭より昨日被達候二付、本日午後三條公へ参殿拝謁候処、ピアノ傳習致候者、伶人之内二有無御尋二付、是迄一向無御座、漸近々予外老人傳習始候旨申上候処、伶人之内ニテ傳習致置候ハバ、後来之都合ト存候間、有志之者壺両名教師二付、傳習候様致度、就而者教師之謝儀ハ上より出来候様可取計二付、松野クララ江依頼致候様、尚又三條公よりも松野へ申入置候旨被命候二付、早々松野へ依頼仕、左右可申上旨御答申上退出ス。復習之儀ハ三條公ニ御備付二相成候。ピアノヲ即用呉候様被命。

なぜ、三條実美がピアノ学習を積極的に支援したのか、詳しい背景は不明である<sup>3</sup>が、これに

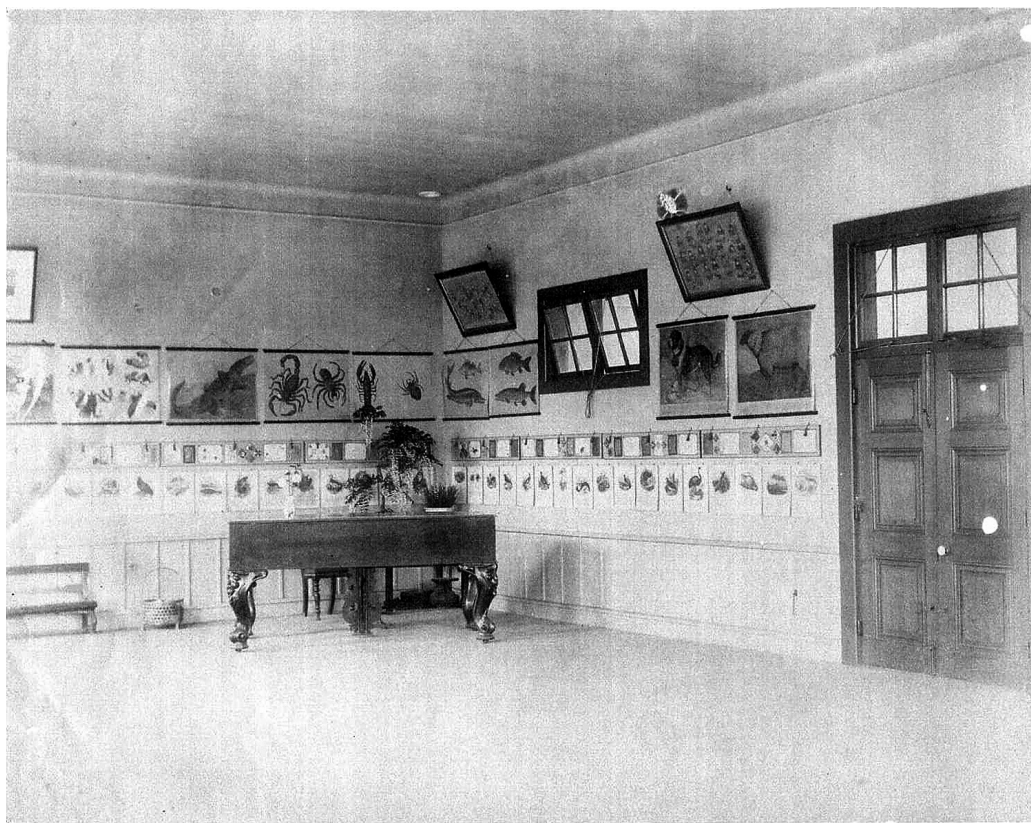
3 三條実美のほか、西郷従道、岩倉具視等、当時政府の要職にあった人々の多くは、子弟を女子師範学校附属幼稚園に通わせていた（倉橋・新庄 1956 : 82, 85, 131)。このことが、三條実美のピアノ学習奨励に結びついた可能性も無いとは言えない。

端を発して11月30日に伶人のピアノ伝習許可を願う上申書が提出され、明治12年2月13日には芝葛鎮が出物のピアノを稽古所用に55円で購入、3月14日に再提出された上申書を受けて、3月19日に4人の伶人の洋琴伝習が許可された。明治13年1月には再度洋琴買上願が出され、2月には横浜で稽古所用ピアノを224円で購入、リチャードソンのニュー・メソッドを用いて伝習が進められた。3月にメーソンが来日すると、伶人たちは10月より文部省の御用掛として音楽取調掛に勤務するようになり、後述の第三段階の動きに合流することになった。芝葛鎮の日記では、音楽取調掛に勤務するようになってからも松野クララの下でピアノの伝習を続けたことが跡付けられる（中村1993:212-220）。

### 1.3 現存資料：女子師範学校附属幼稚園遊戯室の写真

図版1は、女子師範学校附属幼稚園・遊戯室の写真（お茶の水女子大学附属図書館所蔵）である。撮影の時期は明治20年代から30年代周辺と考えられるが、このピアノが、附属幼稚園設立当初に備えられたものかどうかは定かでない。ピアノの後ろ側から写しているため、メーカーや鍵盤数は不明であるが、スクエア型で脚が湾曲していることは確認できる。

図版1：女子師範学校附属幼稚園遊戯室



（所蔵：お茶の水女子大学附属図書館）

## 2. 第二段階 体操教育

### 2.1 体操教育とピアノ購入記録

ボストンでメーソン招聘の準備を進めていた伊澤修二は、明治11年5月に帰国して文部大輔の田中不二麿にメーソンの掛図を手渡した。しかし、音楽取調掛の設置よりも先に体操伝習所の設置が決まり、実際には体操教育のためのピアノが先に購入されることとなった。伊澤修二が体操取調掛長としてアマースト大学から招聘した指導者ジョージ・アダムズ・リーランドの意見書の中には、

各級皆其運動ノ為ニ体操場ヲ用エルベキ一定ノ時間アリ…[中略]…各生皆体操場ニ集合シ号笛ヲ以テ列ヲ作り行進ノ隊列ヲ為ス…[中略]…次ニ大洋琴ノ音楽ニヨリテ規定ノ運動ヲ為ス此時間大凡十分ヨリ十五分ニ至ル…」（『教育雑誌』84:10-11）

といった記述があり、体操場〔体育館〕にピアノを設置することが当然のように記されている。体操教育のためにピアノを備えることは現代の我々にとっては奇異な感じがするが、録音技術のなかった当時、ラジオ体操の伴奏が常にピアノで生演奏されたと考えれば理解しやすい。10月24日に体操伝習所が設置され、五つの文部省直轄学校、すなわち東京大学、大坂英語学校、東京外国語学校、高等師範学校、女子師範学校における体操教育がリーランドの指導の下に行われることとなった（『文部省往復』明治11年9月6日）。

幼児教育の場合と同様、体操教育の開始とともにピアノの購入・設置が実現された。明治12年3月25日の『文部省往復』には

体操術教用ピアノ四個先般購求御廻送相成候処今般右同様之ピアノ尚式個需要候ニ付更ニ該品貳個購求文部省エ御廻送有之度…

とあり、先に注文した4台のピアノが3月には到着し、さらに同じ仕様様のピアノ（1台285ドル）を2台追加注文したことがわかる。一方、チッカリング社の出荷記録には、明治11年12月19日に〔文部卿〕西郷従道に宛てて4台のスクエアピアノ（製造番号53134、53240、53290、53296）が出荷されたことが記されており、これが最初の注文の4台と考えられる。4台は、いずれも明治11年製造の7オクターブ・湾曲脚のスクエアピアノであった<sup>4</sup>。

---

4 出荷記録では、いずれも仕様が R [=ローズウッド] 7 [オクターブ] Front Cor Ro [=前面角曲面仕上げ] S.Mo [= single moulding?] CL [= curved leg 湾曲脚] [Scale] 51 となっている。なお、出荷記録を概観すると、4台のピアノが出荷された明治11年末における出荷台数はスクエア47%、アップライト46%、グランド7%の割合で、まだスクエアが主流であったことがわかる。この割合は、翌明治12年の前半にはスクエア38%、アップライト53%、グランド9%となり、アップライト主流へと転じた。

図版 2 : チッカリング社出荷記録 (明治 11 年)

December	14	53279	R	7	Wright Sewall Truss	67	10	Wm. G. Griffin	Manchester N. H.
January	14	53280	R	7	Wright Sewall Truss	85	10	J. C. Taylor & Co.	Cambridge Mass.
January	25	53281	R	7	All Cor. Re. S. Mo.	50		W. H. Brown	Philadelphia Pa.
January	25	53282	R	7	Frank Cor. Re. S. Mo.	57		J. H. Granger	Milwaukee Wis.
December	19	53283	R	7	Frank Cor. Re. S. Mo.	57		W. H. Wimmer	Cambridge Mass.
December	24	53284	R	7	Wright Sewall Truss	67	11	Church & Co.	at 245 Marlboro St. Boston Mass.
March	26	53285	R	7	Frank Cor. Re. S. Mo.	50		Chickering & Sons	New York
January	11	53286	R	7	Wright Sewall Truss	79	12	156	
January	2	53287	R	7	Frank Cor. Re. S. Mo.	57	c	Chickering & Sons	New York
January	9	53288	R	7	All Cor. Re. S. Mo.	57	c	H. F. Swenford	New York
January	15	53289	R	7	Frank Cor. Re. S. Mo.	57	c	156 June 4/79 John	Leavenworth Kan.
December	19	53290	R	7	Frank Cor. Re. S. Mo.	57		W. H. Wimmer	Cambridge Mass.
December	14	53291	R	7	Wright Sewall Truss	67	10	J. H. Granger	Milwaukee Wis.
December	16	53292	R	7	Wright Sewall Truss	67	11	Chickering & Sons	New York
1890-3/23/91		53293	R	7	Wright Sewall Truss	79	12	156	Wm. G. Griffin
January	15	53294	R	7	Wright Sewall Truss	79	12	156	
December	23	53295	R	7	Frank Cor. Re. S. Mo.	57		W. H. Wimmer	Cambridge Mass.
December	19	53296	R	7	Frank Cor. Re. S. Mo.	57		W. H. Wimmer	Cambridge Mass.
February	5	53297	R	7	Frank Cor. Re. S. Mo.	57		W. H. Wimmer	Cambridge Mass.
December	18	53298	R	7	Wright Sewall Truss	67	10	156	
February	5	53299	R	7	Frank Cor. Re. S. Mo.	57		W. H. Wimmer	Cambridge Mass.
February	1	53300	R	7	Frank Cor. Re. S. Mo.	80		W. H. Wimmer	Cambridge Mass.

所蔵：Archives Center, National Museum of American History, Smithsonian Institution

体操術教授用になぜ合計 6 台ものピアノを購入したのか、その理由を明示する資料はない。しかし、前述のように、体操伝習所に加えて五つの直轄学校でリーランドが教授することを考えて合計 6 台であったと推測することは可能である。実際、高等師範学校と女子師範学校には同じ年度 (明治 11 年 9 月～明治 12 年 8 月) 内にピアノが 1 台ずつ文部省から交付された (『文部省第七年報』 347, 353)。体操伝習所には明治 13 年 3 月 1 日に交付されている (交付台数は 2 台であった可能性もある<sup>5)</sup>。

明治十三年三月ヨリ体操教場ニ洋琴ヲ備ヘ体操演習ノ奏楽ニ合節シテ運動ノ調子ヲ理スルノ具トナス (『体操伝習所一覽 明治 17, 18 年』 3)

## 2.2 導入後の問題点

ピアノの導入が音楽教育分野ではなく幼児教育分野と体操教育分野で先に実現したことは、音楽教育の立場から見れば意外ではあるが、洋楽導入の中心となって活動した目賀田種太郎、伊澤修二、田中不二麿の活動の全容を考えれば、彼らが最初から音楽だけに注目していたので

5 大正 15 年に出版された『明治事物起源』増訂版では、体操伝習所にはピアノが 2 台あったと記されている。「当時の学生は着流しにて、袴を着けたるものも無かりし、但し、当時の体操は、初期なるに拘はらず、体操そのものは頗る立派なりし、ジムナジウムとも言ふべき屋根は非常に高く、四方には体操器械を掛け並べ、二階棧敷の如く、見物すべき廊下あり、下にては、二台のピアノにて、宮内省の雅楽師と林学博士松野寛 [嗣] の夫人クララと奏樂して各種の体操を行へり。」(石井 1926 : 578 ; 中村 1993 : 221)

はなく女子教育、幼児教育、体操教育、盲人教育等、教育全般に幅広く目を向けていたことは明らかである。また、体操教育は、生徒が健康で学習を継続するために緊急に必要とされていた。後年、伊澤修二は次のように説明している。

其時代に於ける我国の教育界は百事草創の際で、旧新の事物が乱麻の如く紛然として雑処するといふ有様であった、故に生徒の体育などといふ方面まで着手する余力は無かったのである、けれ共唯学問ばかり勉めしめて体育を顧みなければ、生徒の身体は日々に衰へて仕まうとは、朝野の有識者の等しく慨嘆する所であった。(伊澤 1912 : 51)  
実際、明治 10 年代の『文部省年報』に掲載された各直轄学校の年報では、病気による生徒の退学・死亡者数や体格の向上等についてしばしば言及されている。

だが、体操教育用に複数のピアノを導入して最も大きな問題となったのは、実際にピアノを弾ける（或いは扱える）人間がないという現実であったものと推測される。最初にピアノが導入された女子師範学校附属幼稚園には松野クララがおり、女子師範学校にさらに体操教育用のピアノがもう 1 台配分されると、明治 12 年 5 月には「機械音楽（インスツルメンタル・ミュージック）」の講師として東京大学理学部化学科教授のフランク・F・ジュエット（東京大学 1987 : 231-233, 256, 437）も加えて招聘され、1 回 2 時間、週 2 回の指導を担当した。

今回当校ニ於テ機械音楽（インスツルメンタル、ミュージック）伝習相始メ申度ニ付 差向キ毎週両回（一回二時）右授業之儀東京大学理学部教授米人エフ、エフ、ジュエット氏へ依頼シ一ヶ月金三拾円報酬トシテ相贈申度候条…（後略）（『文部省往復』明治 12 年 5 月 7 日）

ピアノという楽器が到着しても、肝心の唱歌教育の内容が定まっておらず、また弾ける人間もほとんどいなかったため、しかたなく、音楽が専門ではないジュエットに初歩的な奏法の指導を依頼したものと思われる。この結果、女子師範学校では、唱歌教育よりも前に、一時的に器楽としてのピアノが教えられることとなった。一方、同じ時期にピアノが配分された高等師範学校では、ピアノの弾き手を依頼した記録は見当たらない。体操伝習所にピアノが配分された明治 13 年 3 月には、松野クララが「楽人」として「洋琴弾方ヲ囑託」されて体操伝習所に移り、女子師範学校における松野クララとジュエットへの委嘱期間は終了した（『文部省第八年報』436, 487）。弾き手がないために、ピアノが到着しても持て余し気味であったと推測されるこの時期、ボストンからメーソンが到着して、ようやく音楽取調掛を中心に音楽教育が進められることとなった。

### 3. 第三段階：音楽教育

#### 3.1 ピアノ導入に関する文書資料

明治 12 年 3 月 25 日、メーソンの招聘決定を受けて、ここで初めて音楽教育のためにピアノ



を購入することとなった。4月に文部省会計課長からポストン在住留学生監督の目賀田種太郎に対して記された文書には、音楽教授用のピアノ5台および音楽教科書の購入が指示され、ピアノは1台500ドル見当で5台（計2500ドル）、音楽教科書はおよそ500円と見積もられている（『文部省往復』明治12年4月）<sup>6</sup>。

文部省ニ於テ音楽伝習所開設可相成ニ付音楽教師招雇方等今回学第五百八十七号公信ヲ以テ貴下エ照会相成候ニ付テハ右音楽教用之為適当之ピアノ及音楽教科書需要候ニ付前段招雇可相成音楽教師エ可然御商議之上ピアノノ方ハ壹個ニ付凡米金五百弗位之品五個購入音楽教科書ト共ニ文部省エ御廻送有之度尤右購求費之儀ハピアノ五個之代金ヲ米金弐千五百弗ト見積音楽教科書代金ハ凡積我金五百円トシ而メ之ニ海陸運賃及海陸保険料トシテ概算米金四百三拾五弗ヲ加ヘ合計米金弐千九百三拾五弗及我金五百円ハ今便東京大学法理文学部ヨリ可及廻送答ニ候条前段可然御取計有之度此旨及照会候也

明治十二年四月

会計課長 文部権大書記官 辻新次

米国波士敦府在留 留学生監督目賀田種太郎殿

この記述で注目に価するのは、ピアノを東京大学法理文学部の予算で購入していることであり、音楽取調掛の予算による購入ではないということである。ここから、最初のピアノ購入に関する文書が音楽取調掛創設期の文書（東京芸術大学所蔵）の中に残されていない理由を理解することができる。

文部省会計課長からの指示を受けた目賀田は、4月7日付で帰朝を命じられており（故目賀田男爵伝記編纂会1938:28）、メーソンの来日手配や残務整理ののち、9月14日に東京に帰着した（『公文録』明治12年7月～9月発着之部）。この間にボルチモアのクナーベ社からピアノ11台が田中不二磨宛に出荷されたことが、8月9日付のボルチモア発行の日刊紙 *The Gazette* に報道されている。

日本におけるアメリカ式音楽院

昨日、東京の日本政府に向けてボルチモアのピアノが委託出荷されたことは、米国におけるピアノ産業と日本人の音楽教育にとっての画期的な出来事であった。このピアノは日本政府が購入した最初の楽器であり、米国のあらゆるピアノ製品の中から購入品を選定するに当たって、ニューヨークの日本の commissioner [=目賀田種太郎] が有名なボルチモアのピアノ製作者クナーベの楽器の長所を高く評価してその製品の購入を決定したことは、記録にとどめるべき喜ばしい事実である。11台のピアノ——スクエアピアノ10台とアップライト1台——が、ボルチモアからオハイオ鉄道を経由してカリフォルニアに送られた。そこからは汽船で送ら

6 この資料についてご教示くださった日本リードオルガン協会の赤井励氏に、心より感謝申し上げます。

れ、箱には「H.E.Tarraka Feizirnaró<sup>7</sup> [田中不二麿＝当時の文部大輔], Educational Department, Tokio, Japan」と記されている。これらの楽器は日本の公立学校で用いられる計画であり、日本人の間に音楽趣味と文化が定着・拡大するとともにもっと多くのピアノの出荷が始まり、米国製ピアノ販売の取次販売業務が確立されるのは時間の問題であろう。[中略] 日本の文部省は、天皇の指示の下に、公立学校システムとの結びつきを視野に入れながら、ついに音楽院を設立することに同意し、準備を始めた。ボストンのメーソン教授に対して、助手1名を伴って来日し、その教育システムを日本で展開するよう依頼した。彼らはすでに日本に向けて旅立ち、数ヶ月、おそらくは1年間滞在する予定である。日本政府がこの決定をした後、ニューヨーク滞在の commissioner は、アメリカで最も性能のよいピアノを選ぶよう指示された。数台、おそらく3～4台のピアノが、最近アメリカ留学から日本に戻った者たちの家庭で用いるために日本に送られた。[後略]

ここで気づくのは、ピアノの台数が当初の予定より増えていること、また体操教育用とは異なり、クナーベ社を「選定」したということである。アップライト1台とは、メーソンが自分用に送らせたもの(製造番号19750:東京芸術大学附属美術館に現存)と考えられるが、スクエアピアノの数が5台から10台に増えている。クナーベを選定した理由としては、まず同社のピアノが、かつて田中不二麿や西郷従道が参加したフィラデルフィア米国百年期博覧会で名誉ディプロマを獲得していることが挙げられる。また、メーソンが自分用のアップライトピアノを送る都合もあり、ボルチモアで教えていた経験もあることから、メーソンに紹介されたという可能性も否定できない。記事にあるとおり、クナーベ社は日本がアメリカ製ピアノの新しい市場となることを期待して、チックリング社の納入額(1台285ドル)よりも安い1台250ドルという価格を提示したのであろう。一方、記事の引用部分最後に記されている「3～4台のピアノ」については、どのメーカーのものであったのかも、また誰に送られたのかも不明である<sup>8</sup>。

8月8日に出荷されたピアノは、9月13日にオシャニック号<sup>9</sup>でサンフランシスコを出港し、横浜には10月3日に到着した(*Japan Weekly Mail* 1879/10/4:1334, 1337)。10月10日付で、楽器を東京大学法理文学部から文部省へ差し出し、楽器代金として東京大学が支出した金額は、明治12年度から14年度にかけて補助金増額という形で返金するという内容の文書が発行されている(『文部省往復』明治12年10月10日;『重要書類彙集』明治13年3月10日)。音楽

7 この綴りは、明治13年に出されたクナーベの製品目録(Knabe 1880)に引用された際にはTanaka Fujimaroと正しく表記されており、クナーベ社が宛先を正しく把握していたことは間違いない。

8 明治12年11月8日の*Boston Herald Supplement*の記事には、メーソンが日本に招聘された経緯が詳しく紹介され、「メーソン氏はすでに、日本に15台のピアノと4台のオルガンを発送している。そして、メーソン氏の仕事によってそのような楽器の需要が起これば、日本という国は楽器の最大の海外市場になるだろう」と記されている。しかし、このピアノとオルガンの台数の根拠は定かでない。*Boston Herald Supplement* 1879/11/8; 手代木1999:133.

9 メーソンの個人用アップライトピアノに関して現存する文書(『往復書類 会計局の部』明治13～14年)では、オシャニック号で運ばれたことが明記されている。

取調掛が設立された10月23日には、横浜の開通社から「先に引き取りを命じられた田中氏宛、およびメーソン氏宛荷物を14日に引き取った」との知らせが文部省に到着した（『往復書類 会計局の部』明治13～14年）。10月30日付の文書には、楽器を文部省が受け取ること、ピアノ5台の予定が10台になった経緯と、ピアノ椅子1脚が目賀田種太郎の心付けで付されたことが記されている（『文部省往復』明治12年10月30日）。

会第八百五十六号

本年三月及四月中貴学部ヨリ回金之上当時在米留学生監督目賀田種太郎江委托購求候ピアノ及音楽教科書等此程前記之通悉皆到着当方ニ於而受取方取計置候条此段及御通牒候也

文部省会計課長 埜村素介

明治十二年十月三十日

東京大学法理文学部総理 加藤弘之殿

追而前記之品々購求費支払之顛末ハ本月十五日付ヲ以テ及御回付候目賀田種太郎計算書之通ニ候条右ヲ以テ御領悉有之度候也

別記

一 ピアノ式箇

是ハ本年三月中在米目賀田種太郎へ注文四月廿五日附ヲ以貴学部へ及御通牒候分

一 ピアノ拾箇

一 音楽教科書壱箱

一 ピアノ用腰掛壱箇

是ハ本年四月中前同人江注文同月九日附ヲ以テ貴学部へ及御通知候分但本文ピアノハ最前凡米金式千五百弗ヲ以テ五個購求ノ積ニ候処右金額ニテ本文之通拾個購求行届候趣ニ有之且又ピアノ用腰掛ハ注文外目賀田種太郎心付けヲ以テ購求相成候儀ニ有之候事

こうして音楽取調掛が創設された明治12年10月には、体操教育用に追加購入したピアノ2台と音楽教育用に購入したピアノ10台〔クナーベ〕と音楽教科書が文部省に到着したように見える。しかし、実際にはどうであったのだろうか。ピアノの箱は開けられることなく、そのまま半年ほどどこかで保管されたと考えられる。というのも、明治13年3月にメーソンが来日して1ヶ月半が経った4月15日付の文書で、ピアノ合計12台と音楽書78冊を東京大学から文部省に差し出す書類上の手続が再びとられているからである（『文部省往復』明治13年4月15日）。

東京大学法学部  
理学部  
文学部

昨明治十二年中其学部ヨリ廻金米国ヨリ買入候ピアノ及び音楽教科書等別紙目録之  
通文部省ニ於テ需用候ニ付悉皆文部省へ可差出此旨相達候事  
明治十三年四月十五日

文部卿 河埜 敏鎌

- |                   |     |
|-------------------|-----|
| 一 ピアノ 拾式箇         |     |
| 一 ピアノ用腰掛 壹箇       |     |
| 他に書籍左ノ通           |     |
| 一 ハイエル、メトデ        | 式拾冊 |
| 一 プライジー、スタジース     | 壹冊  |
| 一 ウイク、メトデ         | 壹冊  |
| 一 セロニー            | 式冊  |
| 一 クレメンチー          | 式冊  |
| 一 クーロー            | 四冊  |
| 一 ベルチニー           | 六冊  |
| 一 ジアバリー           | 式冊  |
| 一 ケーレル、キンデルユーブンゲン | 式冊  |
| 一 ミュルレル、ユーブンスチユック | 式冊  |
| 一 ケーレル、ホルクスメロジー   | 式冊  |
| 一 ケーレル、ダンススポプレー   | 壹冊  |
| 一 ケーレル、ホルクススタンツエ  | 壹冊  |
| 一 エメリース           | 式拾冊 |
| 一 リトルフ            | 拾式冊 |

計七拾八冊

ここから、ピアノ 10 台と音楽書 78 冊が 5 月 25 日に音楽取調掛に回付され、ピアノは昌平館で受け取るように<sup>10</sup>と指示された（東京芸術大学附属図書館所蔵『往復書類 会計局の部』明治 13～14 年）。また同日、体操教育用のピアノ 2 台のうち 1 台は「東京大学予備門体操術教用トシテ」東京大学法理文学部に交付された（『文部省往復』明治 13 年）。残りの 1 台は、

---

10 5月の段階でピアノが昌平館にあったとすると、メーソン到着（3月）の際に掲載された *Japan Weekly Mail* の記事内容（音楽取調掛の練習室 10 室にそれぞれ 1 台ずつ、計 10 台のクナーベ製ピアノが準備されている）は、実際に見て確認した情報とは考えがたい。メーソンのアップライトピアノも昌平館から音楽取調掛へ運ばれたが、横浜から昌平館に運ばれた時期は定かでない。明治 13 年 4 月 19 日には昌平館に到着していたと考えられる（『往復書類 会計局の部』明治 13～14 年）

東京外国語学校（後述）に配分された可能性がある<sup>11</sup>。6月12日には、文部省官立学務局長が次のような文書を送付している（『文部省往復』明治13年）。

官学第百八十八号

旧在米留学生監督目賀田種太郎へ依嘱米国ニ於テ購求之体操術用ピアノ先頃到達此頃開函候処貴学部矢田部良吉宛包式個在中候二付乃及廻廻付候条領収証御差出有之度候也

明治十三年六月十二日

文部省官立学務局長

東京大学法理文学部総理 御中

これによれば、[明治12年10月に横浜に到着していた]ピアノの箱を明治13年6月になって初めて開けたところ、中から矢田部良吉宛の小包2個が出てきたとのことであり、ピアノの箱は8ヶ月も開けられないままになっていたことになる。音楽取調掛においても状況は同様で、昌平館からピアノを運び込んだのち不要になった箱を廃棄してよいかと問い合わせたのは6月18日であった（『往復書類 会計局の部』明治13～14年）。当時のピアノの輸送と設置には、現代よりもはるかに多くの時間を費したのである。

海路を運ばれたのち湿度の高い日本でこのように8ヶ月も箱詰めのままだったとするならば、12台のピアノの状態が良好であったとは思えない。明治28年にメーソンの叙勲に際して作成された功績調査書には、以下のような説明がある。

当時本邦ニハ未ダ洋琴ノ調律者アラズ音楽取調掛ニハ文部省交附洋琴拾三台<sup>12</sup>アリ此ノ洋琴舶来ノ後箱詰ノ儘久シク昌平館ニ保存シアリアルヲ以テ其工合頗ル悪シク一旦調律スルモ調子常ニ定マラズ氏ハ朝食夕食ノ前後又ハ些少ノ余暇ヲ以テ此ノ洋琴ノ調律ヲ担当セリ此ノ業ヤ亦実ニ篤志ト謂フベシ [中略] 文部省直轄体操伝習所ニモ亦一箇ノ洋琴アリ是レ体操ノ挙動ヲ律スルモノナルガ故ニ弾手ノ勢力随テ強ク鋼鉄ノ弦モ亦輒チ断ル事アリ氏常ニ往テ之ヲ修ス一月ノ間或ハ数回ニ及ブコトアリ然レトモ曾テ倦色ナシ（中村1993:759）

実際に、14年1月には、「東京外国語学校体操演習ピアノ不調二付」メーソンに調律を依頼したことが記録されている（『諸向往復書綴』明治13～15年）。メーソンはまた、上真行や辻則承ら音楽取調掛の教師たちに調律法を指導し、帰国後は彼らがメーソンに代わって各学校のピアノの調律を引き受けた（『音監往復書類』明治16年）。

11 東京外国語学校には明治14年1月にピアノが存在したことが確認でき（後述）、明治13年中に配分されたと推測される。他方、文部省直轄学校として体操教育が行われていた大坂英語学校（中学校）については、地理的に遠隔であったためか、明治13年頃にピアノが交付された記録はない。確認できる最も古い記録は、明治15年6月1日に国内業者より95円で購入した記録（『大坂中学校 諸物品買入何綴、仕出番号帳』）で、「新二洋琴ヲ購ヒテ体操場ニ備置シ漸ク之ヲ用キテ体操ノ節度ヲ調ス」（『大坂中学校第十三学年報』）と説明されている。

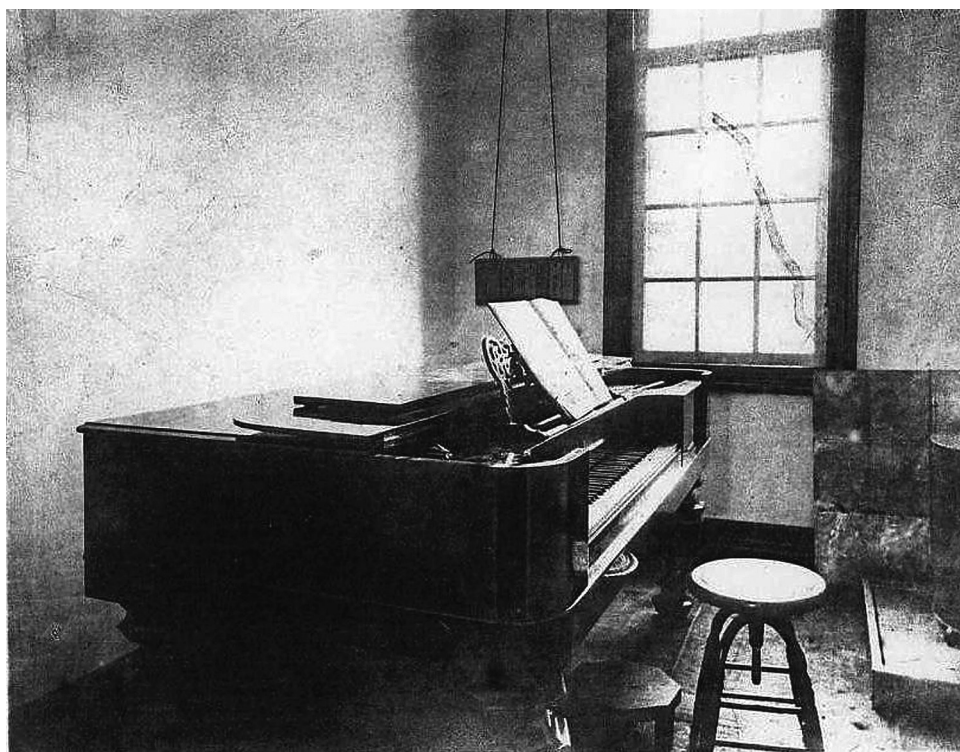
12 音楽取調掛に文部省交付のピアノが13台あったとする記述は、これ以外の記録とは合致せず、記憶違いと考えられる。明治22年3月29日の段階でも、東京音楽学校所有の文部省交付のテーブル[スクエア]ピアノの台数は10台であった（東京芸術大学 1976:438）。

### 3.2 現存資料：音楽取調掛のピアノの写真

音楽取調掛の練習室を写した写真として、遠藤宏『明治音楽史考』の口絵に示された2枚（第六図・第七図）が知られている。このうち第七図について、宇都宮謙三氏は、この写真のオリジナルポジをデジタルカメラで撮影・拡大したところ、鍵盤中央のロゴをクナーベと判読することができたと報告している（宇都宮 2001：157-159）。

また『図説日本文化史体系』には、遠藤宏の解説により別の練習室の写真（図版3）が掲載されている（遠藤 1967：261）。かなり横の角度から写されているために鍵盤中央のロゴを判別することはできないが、脚が湾曲型ではなく円柱状であることが確認できる。ここから、音楽取調掛用に購入したピアノは、少なくとも脚の型が10台すべて同一ではなかったことがわかる。

図版3：『図説日本文化史体系』に掲載された音楽取調掛練習室の写真



（所蔵：日本近代音楽館）

### 3.3 現存楽器：聖徳大学のクナーベ製ピアノ # 19768

聖徳大学に現存するクナーベのピアノ（宇都宮 2001：160）は、7オクターブのスクエア型で、脚の型は湾曲している（図版4）。

特に魚か鯨を思わせるペダルリラのデザイン（図版5）は独特で、前項で挙げた音楽取調掛の楽器の写真（『明治音楽史考』第七図）に見られるペダルリラの形状とは一致しない。

図版4：聖徳大学のクナーベ製ピアノ（修復前）



図版5：ペダルリラ部分



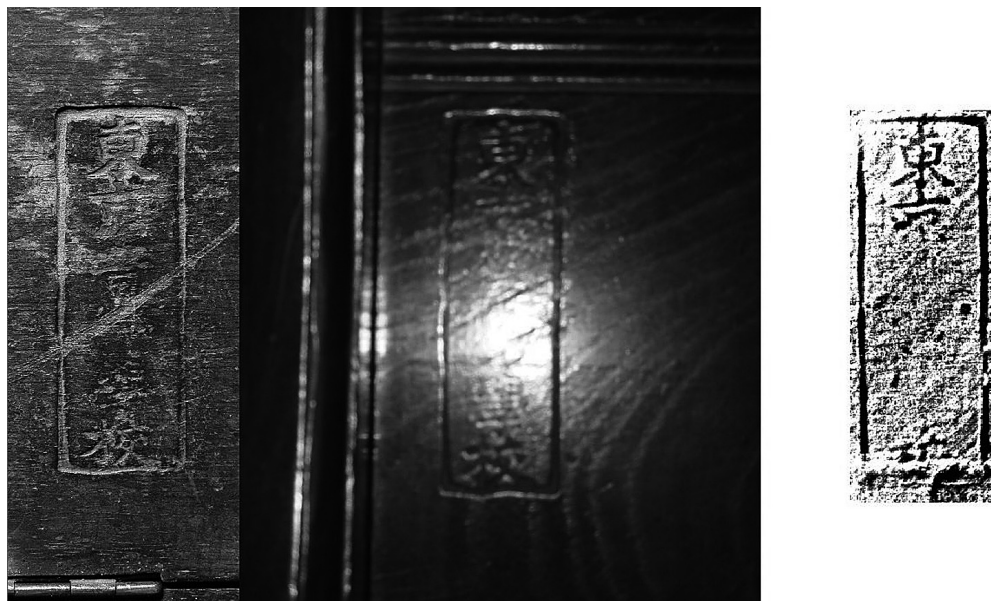
図版6：蓋に押された焼印



この楽器は、以下の理由から、音楽取調掛に最初に入った10台の内の1台である可能性が高い。第一に、製造番号19768は、メーソンが音楽取調掛用の10台と一緒に日本に送った自分のアップライト・ピアノ（東京芸術大学附属美術館に現存）の製造番号19750と非常に近い。体操教育用にチックリング社から4台が送られた際、その製造番号は53134、53240、53290、53296で、必ずしも連番ではなく、最大162離れてはいるが、いずれも53000番台であったことが参考となる。第二の根拠は蓋に見られる焼印（図版6）で、「東京音楽学校」と読むこと

が可能である。経年変化により蓋全体に多少の歪みが生じており、真中あたりの文字が判然としないが、明治14年に才田光則が製作したオルガン（東京芸術大学附属美術館）に押された焼印、また西川虎吉が明治17年頃に製作したオルガン（横浜市歴史博物館）に押された焼印と酷似している（図版7）。この焼印が押されたのは、音楽取調掛が東京音楽学校になった明治20年以降のことではあるが、それでも、明治10年代に製作された複数のオルガンと同じ焼印<sup>13</sup>が押されているとすれば、このピアノも音楽取調掛時代以来のものである可能性が大きいと考えられる。

図版7：焼印の比較（左から西川オルガン、才田オルガン、聖徳大学のクナーベ製ピアノ）



このピアノは、昭和52年8月に聖徳大学に寄付されたが、それ以前の持ち主や来歴については不明である。平成20年に修復され、演奏可能な状態となった。

#### 4. その他の現存楽器：東京芸術大学のチッカリング製ピアノ # 53749

東京芸術大学美術館所蔵のチッカリング製ピアノ（製造番号は53749）は、昭和46年まで東京大学にあったものである。このピアノの来歴については諸説あるが、戦後から現在までについては明確である。すなわち、昭和24年に、岸辺成雄教授が東京大学教養学部において古

<sup>13</sup> 楽器の側面に縦に並べて刻印されている「一七」という漢数字も、音楽取調掛の所蔵楽器であったことと関連する可能性がある。



いピアノを探した際に発見されたもので、発見時には鍵盤3鍵と蓋、足等が消失していた。その後22年間岸辺研究室に保管されたのち、昭和46年に東京大学から東京芸術大学に移管（岸辺1972）され、平成14年までそのままの状態でもめ置かれ（図版8）、平成19年に日本ピアノ調律師協会の手で演奏可能な状態へと復元・修復された。

チッカリング社の出荷台帳によれば、このピアノは明治12年4月23日に出荷された（図版9）。体操教育用に2台の追加購入を決定したのが3月25日であることを考えると、これは追加購入分の出荷である可能性が大いにある。しかし、出荷先は日本ではなく、サンフランシスコの楽器店ハマー社であった。そもそもこの時期にチッカリング社からピアノが日本に直送された記録は、西郷従道宛の前述の4台以外には存在しない。従って、この楽器が文部省の購入によって東京大学に入ったものだとするならば、体操教授用に追加購入した2台のうちの1台で、ハマー社を経由して送られたものと推測するしかない。しかし、なぜ追加購入の2台が日本に直送されずハマー社経由であったのか、その理由は現存資料だけでは解明できない。出荷台帳によると、このピアノも最初の4台と同じ7オクターブのスクエア型、脚も湾曲型で、これがいわば明治期にピアノを導入する際の統一規格であったのではないかと考えられる。

いずれにしても、明治12年のボストンの出荷記録から昭和24年の東京大学教養学部に至る

図版8：チッカリング製ピアノ#53749（修復前）



図版9：チックリング社出荷記録（明治12年）

rail	5	53730	Rc	7/1	Wright Sewell Truss	79	1/2	Whickering & Sons	New York
rail	10	53731	Rc	7/1	Wright Sewell Truss	70	9/16	Whickering & Sons	New York
way	16	53732	Rc	7/1	Wright Sewell Truss	70	9/16	Whickering & Sons	New York
way	2	53733	Rc	7/1	Franklin P. Co. & Mrs. Ch.	57		Wright & Smith	Woods Hole N.S.
rail	23	53734	Rc	7/1	Franklin P. Co. & Mrs. Ch.	57		S. Harding	Quincy Ill.
arch	10	53735	Rc	7/1	Semi Grand S. Mo.	84		Doyle & Dodge	Boston
arch	17	53736	Rc	7/1	Wright Sewell Truss	67	1/16	J. P. Daniels	Louisville Ky.
arch	15	53737	Rc	7/1	Wright Sewell Truss	67	1/16	W. Richards	Seasidee Mass.
rail/pil	18	53738	Rc	7/1	Franklin P. Co. & Mrs. Ch.	57		J. Parker & Co.	Cambridge Conn.
arch	19	53739	Rc	7/1	Wright Sewell Truss	67	1/16	Philip Perkins	New Orleans La.
rail	24	53740	Rc	7/1	Franklin P. Co. & Mrs. Ch.	57		Wickham & Sons	New York
arch	14	53741	Rc	7/1	Wright Sewell Truss	67	1/16	W. Hebbel & Sons	Philadelphia Pa.
arch	15	53742	Rc	7/1	Wright Sewell Truss	67	1/16	Whickering & Sons	New York
arch	15	53743	Rc	7/1	Wright Sewell Truss	67	1/16	W. Hebbel & Sons	New Haven Conn.
March	23	53744	Rc	7/1	Wright Sewell Truss	79	1/2	S. T. Hammer	San Francisco Cal.
March	23	53745	Rc	7/1	Wright Sewell Truss	79	1/2	S. T. Hammer	San Francisco Cal.
arch	21	53746	Rc	7/1	Wright Sewell Truss	67	1/16	Whickering & Sons	New York
way	3	53747	Rc	7/1	Wright Sewell Truss	67	1/16	W. C. Alden	Saratoga N.Y.
arch	23	53748	Rc	7/1	Franklin P. Co. & Mrs. Ch.	50		156	
rail	23	53749	Rc	7/1	Franklin P. Co. & Mrs. Ch.	57		S. T. Hammer	San Francisco Cal.
rail	4	53750	Rc	7/1	Semi Grand S. Mo.	84		Whickering & Sons	New York

所蔵：Archives Center, National Museum of American History, Smithsonian Institution

までの70年間に、このピアノがどういうルートで日本に入り、どこで用いられていたのか<sup>14</sup>は、現存資料では確定することができない<sup>15</sup>。

14 再発見者岸辺成雄はこのピアノを「メーソンのピアノ」と呼び、音楽取調掛で購入したのち東京大学に回されたものと推測した。その根拠は、音楽取調掛が東京音楽学校になった際、古い型のピアノは音楽学校選科教室、東京師範学校、東京大学等に分与された」という記憶・伝聞である（岸辺1972；遠藤1948：101；田辺1965：216-217）。しかし、音楽取調掛に最初に入った10台がすべてクナーベ製であったとすると、このチックリング #53749 が音楽取調掛にあったとする推測は成り立たなくなる。このピアノが文部省購入のものであり音楽取調掛で用いられたものとするならば、次のような経緯をたどったとしか考えられない。

明治12年：体操教育用に追加注文された2台のうちの1台として日本に運ばれる

明治13年：音楽取調掛用のクナーベ10台と一緒に合計12台が保管・配分された際に、必ずしもメーカーにこだわらなかったためにチックリング製でありながら音楽取調掛に配分される

明治22年以降：音楽取調掛から東京大学へ

15 東京大学教養学部の前身である第一高等中学校に置かれていたスクエアピアノについては、明治・大正・昭和期に以下の三つの情報が確認できるが、これがチックリング #53749 に関わるものであるのかどうかは確定できない。

- ① 明治23年、第一高等中学校が理科大学（東京大学理学部）からピアノを借用した記録がある。この借用証にはピアノのメーカーや型式等は記載されていない。（小野1974；小野1977：151-156）
- ② 第一高等学校の音楽愛好会「楽友会」が音楽室に所蔵するピアノに関して、大正期に次のように記されている。「一隅にある、ヘンデルが幼時の逸話を思ひ起させる様な古風なピアノは、夫自身にも妙ないはれがあつてこゝに来るのであるが、今はひどく調子がくるつてゐて、到底使用に堪えません。其調律は中々吾等の手にはおへないのであります。」（『向陵誌』1913：554-555）この記事にはスクエアピアノの写真が添えられているが、真横から写されており、辛うじてスクエア型であることがわかる程度でメーカー等は確認できない。
- ③ 第一高等学校音楽室にあったスクエアピアノは、昭和5年に三越百貨店で開催された時好倶楽部主催の音楽展覧会に、「渡来当初のスクエアー、ピアノ」（三浦1930：101）として出展された（『向陵誌』1937：1148-1149）。この楽器については「明治2年特許独逸製」（三浦1931：101）あるいは「明治2年輸入」（日本教育音楽協会1934：75-76）と説明されており、チックリング #53749 とは別のピアノを指しているものと推測される。同じピアノは、昭和15年には、田辺尚雄が提唱した音楽博物館に寄付する話が起ったが、実現しなかった。（『向陵誌』1984：1373-1374）尚、三越1930と『向陵誌』の記述については津上智実氏からご教示をいただいた。心より感謝申し上げます。

## 結論

明治初期、ピアノは日本の公立学校の幼児教育・体操教育・音楽教育という三分野にわたって、それぞれの教育機関の立ち上げと共に導入された。その導入過程は、表1に示すとおり、三段階に分けて考えることができる。第一段階は明治9年から11年にいたる幼児教育分野での導入、第二段階は明治11年から13年にいたる体操教育分野での導入、そして第三段階が第二段階の後半と重なる時期、明治12年から13年にかけての音楽教育分野での導入である。すなわち、音楽取調掛におけるピアノの設置は、出発点としてではなく第三段階として位置づけられることになる。

現存資料により、明治9年に幼児教育用のピアノが1台、明治11年から12年にかけて体操教育用に6台（そのうち4台は確実にチッカリング製）、そして明治12年夏に音楽教育用にクナーベ製が10台、いずれもスクエアピアノが購入されたことが確認できる。当時の楽器で現存する2台のうち、聖徳大学のクナーベ製ピアノ（#19768）は音楽取調掛用に購入されたものと考えられる。これに対して、東京芸術大学のチッカリング製ピアノ（#53749）は、同様に明治12年製ではあるが、明治期から戦前までの間どこでどういう目的のために用いられていたのか、現存資料では確定できない。

ピアノが導入された三つの分野の中で、音楽が一番緊急性の低い学科としてその立ち上げに時間がかかり、ピアノの購入も最後であった。しかし、他の分野で複数のピアノが導入されると、実際に演奏できる人材がいなかったために楽器は長期間箱詰め保管され、ピアノを扱える人材の養成がにわかに必要となり、かえって音楽という教科の必要性が認識される結果になったものと推測される。ピアノという楽器が非常に重くまた高価で、しかもメンテナンスが難しいということは、導入とともに大きな問題点として認識された可能性が高い。明治14年以降、才田光則らを通して国産オルガンの試作が始まり、アメリカの楽器業界の期待とは裏腹に、公立学校の教室にピアノでなくオルガンを備えるという方向性に向かった背景には、初期に購入した17台のピアノを実際に扱った経験と教訓があったように思われる。

（本学教授＝音楽学担当）

表1. ピアノの導入の三段階 (①～⑤の典拠は参考資料欄を参照)

1. 幼児教育関係 1台?	2. 体操教育関係 6台 ※	3. 音楽教育関係 10台
M8/11/29		
M9/2/19		
M9/11/16		
M9/10年度		M10/ 夏
M10/11/27		M11/4
M11/10/19	M11/9	M11/5-7
M11/11	M11/10/24	M12/3/25
M12/3/19	M11/12/19	M12/4/9
M13/3/1	M12/3/25	M12/8/8
	M12/4/23	M12/9/13
	M11/12年度	M12/10/3
	M12/5/16	M12/10/23
		M13/3/2

※計6台のピアノの配分先：高等師範学校 女子師範学校 体操伝習所 (2台?) 東京大学 (東京外国語学校? ; M14年1月には有)

## 参考文献

- 伊澤修二『樂石自伝教界周遊前記』 東京：伊澤修二君還暦祝賀会，1912
- 石井研堂『明治事物起源』増訂版 東京：春陽堂，1926.
- 宇都宮謙三「日本のピアノ事始め」『日本ピアノ調律師協会会報』115(2001)，145-164.
- 遠藤 宏『明治音楽史考』 東京：有朋堂，1948.
- 「音楽」『図説日本文化史大系 第11巻 明治時代』改訂新版 東京：小学館，1967
- 小野健一「メーソンのピアノの借用証」『教養学部報』（東京大学）208(1974)，3.
- 「古ピアノ追跡 明治音楽史の一資料」『比較文化研究』（東京大学教養学部）16(1977)，45-161.
- 岸辺成雄「メーソンのピアノ母校に帰る」『教養学部報』（東京大学）185(1972)，1.
- 倉橋惣三・新庄よしこ『日本幼稚園史』 東京：フレーベル館，1956.
- 故日賀田男爵伝記編纂会（編）『男爵日賀田種太郎』東京：故日賀田男爵伝記編纂会 1938；東京：鳳文書館，1991；東京：ゆまに書房，2002.
- 武石みどり（監修）『音楽教育の礎 鈴木米次郎と東洋音楽学校』東京：春秋社，2007.
- 竹村 一『幼稚園教育と健康教育』 東京／大阪：ひかりのくに昭和出版，1960.
- 田辺尚雄『明治音楽物語』 東京：青蛙房，1965.
- 塚原康子『十九世紀の日本における西洋音楽の受容』 東京：多賀出版，1993.
- 手代木俊一『讚美歌・聖歌と日本の近代』 東京：音楽之友社，1999.
- 東京芸術大学音楽取調掛研究班（編）『音楽教育成立への軌跡』 東京：音楽之友社，1976.
- 東京芸術大学百年史編集委員会（編）『東京芸術大学百年史 東京音楽学校篇』第1巻 東京：音楽之友社，1978.
- 東京大学百年史編集委員会（編）『東京大学百年史 部局史 二』 東京：東京大学，1987.
- 外山友子『《年譜》お茶の水女子大学 音楽の歩み 明治から平成へ』私家版，2003.
- 中村理平『洋楽導入者の軌跡 日本近代洋楽史序説』 東京：刀水書房，1993.
- 日本音楽教育協会『本邦音楽教育史』 東京：音楽教育書出版協会，1934.
- 能勢修一『明治体育史の研究』 東京：逍遙書院，1965.
- 三浦俊三郎『本邦洋楽変遷史』 東京：日東書院，1931.
- 三越（編）『時好倶楽部主催 音楽に関する展覧会誌』東京：三越，1930.
- 安田 寛「唱歌導入の起源について」『山口芸術短期大学研究紀要』25：13-24，1993.
- 「唱歌導入史に関する資料紹介」『山口芸術短期大学研究紀要』26：9-18，1994.
- 「唱歌の起源 日賀田種太郎関係資料と唱歌掛図復元」『山口芸術短期大学研究紀要』29：1-14，1997.

## 参考資料

- 『敬字日乗』（中村正直日記）M9 静嘉堂文庫

- 『東京女子師範学校第三年報』 M10? お茶の水女子大学附属図書館
- 『芝家日記集』（芝葛鎮日記） M11-12 天理大学図書館 …①
- 『公文録』 M12（明治 12 年 7 月～ 9 月発着之部） 国立公文書館
- 『文部省往復』 M11-13 東京大学史史料室 …②
- 『重要書類彙集』 M12-13 東京大学史史料室
- 『往復書類 会計局の部』 M13-14 東京芸術大学附属図書館 …⑤
- 『諸向往復書綴』 M13-15 東京芸術大学附属図書館
- 『音監往復書類』 M16 東京芸術大学附属図書館
- 『大坂英語学校第十三学年報』 M15 京都大学大学文書館
- 『[大坂中学校] 諸物品買入伺綴、仕出番号帳』 M16 京都大学大学文書館
- 『体操伝習所一覽 明治 17, 18 年』 M17 国会図書館
- 『向陵誌』 T2（1913） 東京：第一高等学校寄宿寮
- 『向陵誌』『本郷全史』（S12(1937) 版の複製）, 「駒場編」 S59(1984) 東京：一高同窓会
- Chickering Piano Register*. Chickering & Sons Piano Company Collection, 1864-1985. Archives Center, Smithsonian National Museum of American History. …③
- Wm Knabe & Co.(ed) *Piano=Fortes*. Baltimore, 1880.
- “A Conservatory of American Music in Japan” *The Gazette*. Baltimore, August 9, 1879. …④
- “Music in Japan” *Boston Herald Supplement*, November 8, 1879
- “Mr. Luther Whiting Mason, of Boston, arrived …” *Japan Weekly Mail*, March 6, 1880.

## 謝辞

楽器資料の取材にあたっては、次の方々（敬称略）にご協力いただきました。心より御礼申し上げます。

宇都宮誠一（日本ピアノ調律師協会）、小野哲（日本ピアノ調律師協会）、赤井励（日本リードオルガン協会）、聖徳大学音楽学部、東京芸術大学附属美術館、平野正裕（横浜開港資料館）、刈田均（横浜市歴史博物館）